鶴山書院報
第14号

公益財団法人
孔子の里
〒846-0031
佐賀県多久市多久町
1843番地３東原庠舎内
TEL 0952-75-5112
FAX 0952-75-5320
E-mail ko-si@po.taku.ne.jp
URL http://www.ko-sinosato.com
発行人
理事長 横尾俊彦

家康の愛読書

～治世の要諦とした儒学～

公益財団法人孔子の里
理事長　横尾　俊彦
（多久市長）

「どうする家康」（令和５年のＮＨＫ大河ドラマ）が話題です。今夏の多久山笠にも「三方ヶ原の合戦」「本能寺の変」「大坂夏の陣」の人形山の雄姿が登場。「必殺仕事人」もありました。

戦乱の世を終わらせ、その後２６０余年も続く江戸時代を開いた徳川家康公。「鳴かぬなら鳴くまでまとうホトトギス」も有名です。幼少期から人質として歳月を重ねた家康は、人心の機微を艱難の中で習得したはずです。

家康は読書家で論語にも通じています。家康の『東照宮御実紀』には『論語』の「為政以徳」（政を為すに徳を以ってす）を踏まえ、「政は人心を得るにあり」と記されています。最も熟読したのは鎌倉時代の歴史書である『吾妻鏡』です。『源平盛衰記』も親しみました。四書五経や兵法書も読んでいます。

文禄２年（１５９３年）に、家康は当代きっての儒学者・藤原惺窩（せいか）に出逢います。秀吉朝鮮出兵の前線基地、肥前名護屋城の在陣中に、小早川秀秋の縁で、『貞観政要』の陣中講義が叶います。その後も学び、召し抱えようとしますが辞退され、かわりに弟子の林羅山を推薦されます。その後、羅山は家康の儒学の師となります。

私も年長のＳ氏からの「きっと君の参考になる」の手紙とともにこの名著に出逢いました。

『貞観政要』は中国唐代の太宗皇帝の治世をもとに、治世の在り方、物事の捉え方などが記された古典で、一気に通読しました。

歴史の波を越えてきた教訓

なかでも印象深いのが「諫言」の重要性です。すなわち諫（いさ）める師や側近の大切さです。ともすれば、人は権力の座や、組織の長に就くと、世に言う「お山の大将」と化してしまいかねない可能性があります。細かな配慮や些事にも心をとめて慮って対応するなどが大切だと多くの先輩諸氏が教えを残しています。

けれども、人は諫言に直面すると、プライドの鼻っ柱を折られたかのように感じ、自分より低位の者に言われたくないと立腹して毛嫌いするなど、独善と我儘（わがまま）の罠に陥りかねないのです。しかし「そうあってはならぬ」と忠告します。

歴史の風雪を越えて読まれている古典です。

「諫言」の「かんげん」と同じ響きの言葉に「甘言（かんげん）」があります。こちらは甘く優しく擦り寄るような意味合いのある言葉で、耳障りも良く、ついついこれに傾きかねないもの。しかし、「それではいけない」と戒めます。

よくよく考えると分かる事ですが、諫言を発するには、時に命がけの勇気を要します。真意が伝わらぬまま言葉の文字面のみ受け取られると、間違いなく嫌われ疎まれる恐れもあります。それを超越して物申す。そこに真の忠義や愛情、さらには切願、献身が光ります。

諫言に込められた真の愛情の深さを知らねばなりません。甘く優しい言葉の壺に浸るだけでは、人間性も狂うでしょうし、苦難に耐え努める人の心は見えないでしょう。それではいけないのです。

『論語』をはじめ古典が永年にわたって読み継がれ、人物を錬磨し、人格を陶冶しました。その人こそが歴史を担い、歴史を拓く存在になりました。そこに儒学の学びもあったのです。

いかなる境遇でも「随所に主となる」姿勢を忘れず、ひたむきな生き方が肝要です。そこから新たな人生活路が開かれることを信じたい。

「天命を信じて人事を尽くしたい」ものです。

石井鶴山の「北海観風草」の旅（其の五）

―名刹古刹をたずねる―

熊本大学　教授　中尾健一郎

佐賀藩儒・石井鶴山（一七四四―一七九〇）は、天明六年（一七八六）春に江戸を出発し、中山道から北国街道を経由して越後国（現在の新潟県）に至り、北陸道を西へと向かい越前国（現在の福井県北部）にたどり着いた。当地にて気比神宮に参拝したことは、本連載の其の四にて紹介したとおりであるが、鶴山は曹洞宗の総本山である名刹・永平寺（福井県吉田郡永平寺町）にも参詣している。ちなみに寺院について言えば、「北海観風草」の旅にて鶴山が立ち寄って詩を詠んだのは、次の十箇寺である。

善光寺（信濃）、雲上寺（越後）、瑞泉寺（同上）
永平寺（越前）、空印寺（若狭）、妙楽寺（同上）
智恩寺（丹後）、成相寺（同上）、鰐淵寺（出雲）
阿弥陀寺（長門）

この中で、善光寺、永平寺、および安徳天皇陵がある下関の阿弥陀寺は、特に著名なものである。

今回は「北海観風草」から、「永平寺」および若狭国（現在の福井県南西部）の空印寺（福井県小浜市）で作られた「八百比丘尼入定窟」を取り上げよう。

永平寺

前越（越前）に在り。前三日、正殿罹災し、祖堂、山門等、故の如し

洞山伝道統　洞山　道統を伝え
蘭若倚羊腸　羊腸に倚る
羅漢半千坐　羅漢　半千の坐
祖師四七堂　祖師　四七の堂
星明正法眼　星は明からむ　正法眼
天雨雑華香　天は雨らし　雑華香し
渡宋人安在　渡宋の人　安くにか在る
却教火宅涼　却って火宅をして涼しからしむ

（『石井鶴山先生遺稿』、作品番号５７６）

該詩の題には、鶴山が到着する三日前に永平寺の正殿が火災に遭ったが、祖堂と山門などは無事であったとある。『永平寺年表』によれば、天明六年四月六日、小庫裏にて失火し、客殿や方丈は焼失したが、道元禅師の霊廟である開山堂と仏殿および山門は被災を免れたとある。[1] 鶴山はその三日後に永平寺に参詣しているので、彼が当地に至ったのは四月九日であったことがわかる。

詩本文の大意は次のようである。洞山禅師は仏の教えを伝え、永平寺は羊の腸のように曲がりくねった坂道を登ったところにある。山門には五百羅漢の坐像があり、仏殿には二十八人の祖師が祀られている。星は『正法眼蔵』を明るく照らし、天は恵みの雨を降らせて草花を香らせる。宋に渡り禅の教えを本邦に伝えた道元禅師は世におられないが、その教えは却って煩悩にみちたこの世を清らかにしている。

第一句の「洞山」は、曹洞宗の名の由来となった唐の洞山良价のこと。第二句の「蘭若」は永平寺を指す。第三句の「羅漢半千」は五百羅漢をいう。山門の上層には羅漢像を置いた広間があり、江戸時代には巡礼者も入ることが許されていたという。[2] 第四句はやや難解である。「祖師」には複数の意味がある。宗派の開祖の意味や、禅の公案「祖師西来の意」のように達磨大師を指すこともあり、また、禅を伝えた歴代の師の意味でとる場合もある。[3] ここでは対句の構成に鑑みて、達磨を代表とする歴代の師の意で取りたい。宋の圜悟克勤の『碧巌録』巻十に、「西天四七、東土二三、只だ箇箇の些子を伝うるのみ」（原漢文）という語がある。「西天四七」はインドの二十八人の祖師、「東土二三」は達磨から六祖慧能に至るまでの中国の六人の仏祖。彼らによって仏の教えが伝えられたという言葉であるが、インドの二十八番目の祖師は達磨と重複するため、鶴山の詩における「祖師四七」を歴代の祖師と見なし、「堂」を達磨像[4]などの仏像を安置した仏殿を指すと解した。

第五句の「正法眼」は道元が著した『正法眼蔵』。第六句の「雑花香」は「花祭り」（灌仏会）が催され、その残り香が漂うことをいうだろう。鶴山が永平寺に参詣したのは四月九日、釈迦の生誕を祝う灌仏会の翌日である。灌仏会とは、釈迦誕生の時に甘露が降ったという故事にちなんで、仏像に甘茶を注ぐ行事である。鶴山は、火を消し止めた恵みの雨が、永平寺周辺の花々を香らせたことと、灌仏会後に花の

残り香が満ちていたことを掛け合わせたのであろう。第七句では、渡宋後に曹洞禅を日本に伝えた道元がこの世にいないことを惜しみつつ、最終句にその教えは「火宅」(煩悩にみちた世間)を涼しくするのに十分なものであった、と締めくくる。

該詩は、「北海観風草」において旅中の制作日を特定できるものであり、かつ火災直後の永平寺の様子を窺うことができる貴重な資料となっている。

永平寺参拝の後、鶴山は越前国から若狭国に入り、空印寺に至った。ここで彼は「八百比丘尼入定窟」と題する詩を作っている。まず序文を見よう。

八百比丘尼入定窟

在昔、若州(若狭)の宰佐伯道満なる者、一女を挙げ、千代姐と名づく。嘗て人魚を啖らい、寿八百を得たり。宇多上皇、観音霊刹三十三所を創闢し、後、漸く堙晦す。千代姐、尼と為り、之れを中興して、巡礼すること凡そ四百度、後に小浜城の西の幽窟の中に入定し、発願して曰く、冀わくは身色(身体)を留めて以て後仏の龍華を待たんと云うと。後、後水尾上皇、其の祠に扁して、千代姐明神と号す。

右の内容はおよそ次のようである。若狭国守の娘千代は、人魚の肉を食したことにより八百歳の長寿を得た。宇多上皇が開いた三十三の霊場を、出家した千代は再興し巡礼した。その後、小浜城の西にある洞窟に籠もって断食し、弥勒如来の説法会を待つ誓願を立てた。後水尾上皇はその祠に扁額を掛けた。宇多上皇と後水尾上皇の故事については未詳であるが、鶴山が空印寺に至った頃、八百比丘尼の遺蹟についてはそのように伝えられていたようである。

次に詩の本文を挙げ、二句ずつ解説しよう。

若州刺史誕佳人　若州の刺史　佳人を誕む
一餌人魚亀算新　一餌の人魚　亀算新たなり
寧顧爺孃摩鬢髪　寧くんぞ爺孃の鬢髪を摩るを顧みん
漫帰梵釈避紅塵　漫く梵釈の紅塵を避くるに帰す
霊区重廓上皇蹟　霊区　廓を重ぬ　上皇の蹟
定窟懸期後仏春　定窟　期を懸く　後仏の春
杜宇以催懐古感　杜宇　以て懐古の感を催し
落花祠畔哭千巡　落花の祠畔に哭くこと千巡

(『石井鶴山先生遺稿』、作品番号542)

首聯には、若狭国守が千代を生み、彼女が人魚の肉を食べて亀のような長寿を得たとする。頷聯では、父母が豊かな黒髪を撫でて慈しむのを顧みず、千代が俗世の塵を避け出家した釈迦に帰依したことをいう。頸聯では、千代が宇多上皇の開いた霊場に新たに囲いを重ね、入定窟にて弥勒仏の龍華会を心にかけて待ち望んでいることを想像し、尾聯においては、杜宇が千代を思い起こさせ、花の散る洞窟の傍らで、幾度となく鳴いたことだろう、と詠みおさめる。

第三句の「爺孃」は「父母」を表す詩語。第四句の「梵釈」は「釈梵」、つまり釈迦の意である。ここでは平仄の関係により、語順を顛倒させている。第六句の「後仏」は弥勒。釈迦が入滅して、五十六億七千万年後に出現するという未来仏であり、降臨すると龍華樹の下で悟りを開き、衆生を救うために説法するとされる。それが龍華会である。鶴山は空印寺の入定窟を前にして、洞窟の中で龍華会を待つ千代に思いをはせたのである。

前述のように鶴山は、十箇寺に参詣し、詩を詠んでいる。その内容は、各寺院の由緒や景観等である。火災に見舞われた永平寺や、八百比丘尼の入定窟を取り上げた詩文は、鶴山の仏教に関する知識にとどまらず、天明六年における当地の状況や言い伝えを知ることができるものであり、はなはだ興味深い。

【注】

(1)熊谷忠興『永平寺年表』(歴史図書社、一九七八年)一五五頁。

(2)観光庁ホームページ「地域観光資源の多言語解説文データベース」の「大本山永平寺：七堂伽藍(山門)」の項を参照。

(3)『新版禅学大辞典』(大修館書店、一九八五年)に、「禅宗では正法伝持の歴代の祖を祖師とすることが多い」(七六九頁)とある。

(4)達磨大師坐像は、仏殿本尊の三世仏坐像に同じく、南北朝時代の作。祖師三尊のひとつと考えられている。戸田浩之・椎野晃史編『大永平寺展―禅の至宝、今ここに―』(福井県立美術館、二〇一五年)所収、浅見龍介「永平寺の仏像」二四～二五頁を参考。

草場佩川の『山野一善』（其の二）

佐賀大学　教授　中尾友香梨

本誌第10号において、佐賀県立図書館に蔵されている草場佩川著『山野一善』（以下「県図本」、図１）の序文を紹介した。その後、服部政昭氏より尾形善郎氏旧蔵本（以下「尾形本」、図２）をご提供いただき、県図本は序文の冒頭半丁分が抜け落ちていることが判明した。文字の異同もある。

なおその後、多久市郷土資料館の山口佐和子氏より同館にも『山野一善』と題する資料があるという貴重な情報をいただき、調査したところ佩川の草稿であった。夥しい修正・推敲の跡が残っており、執筆予定の項目がたてられて、まだ内容の埋まっていない丁もある。かなり早い段階の草稿であると判断される（以下「草稿本」、図３）。

これをふまえて今回は、まず県図本に欠けている序文の冒頭部分を紹介し、続いて凡例にあたる「附言」を通して、佩川がどのような基準で『山野一善』に収録する人物を選んだのかを確認しよう。文字は現在見つかっている三冊の『山野一善』（県図本・尾形本・草稿）を照合して定めた。

序の冒頭（県図本に欠けている部分）

天下の善、何の足らざる有りて、古の人を尚友す。友道の一国、一郷に局すれば、其の人、概くべし。然りと雖も、風に聞きて神に交わるは、我れ其れ薫炙観感の益に如かざるを知るなり。抑も世の耳を貴び目を賤しむ者は、往々にして其の志末なり。則ち其の耳に貴ぶ所を見ること有ると雖も、豈に能く沛然として之れに溢れんや。（原漢文、以下同じ）

大意を述べよう。天下の善士（すぐれた人物）は、何に満足できなくて、古の人を友とするのか。友に交わる道を、一国内または一郷内に限定すれば、その人は哀れだ。とはいえ、遠くにいる人の善言や善行をただ噂で聞き、その人と精神的に交わるだけでは、近くにいる人の善言や善行から薫陶を受け、目で見て感ずるには及ばないということを、私は知っている。そもそも耳で聞いたことを重視して、目で見たことを軽視する人間は、往々にしてその志はとるに足りないのだ。したがって、その人が理想とする遠くのことを、たとえ身近で目撃したとしても、水が溢れるような大きな感動を覚えることはないだろう。

佩川の序文は、この後に「孟子曰、舜之所異深山野人者幾希」と前回紹介した内容が続くのであるが、実はこの冒頭部分も、『孟子』万章下の次の言葉をふまえている。

一郷の善士は、斯に一郷の善士を友とす。一国の善士は、斯に一国の善士を友とす。天下の善士は、斯に天下の善士を友とす。天下の善士を友とするを以て未だ足らずと為すや、又た古の人を尚論（論評）す。其の詩を頌し、其の書を読むも、其の人を知らずして可ならんや。是を以て其の世を論ず。是れ尚友（昔の賢人を友とすること）なり。

大意を述べる。一郷においてすぐれた人物は、同じ郷内のすぐれた人物を友とし、一国においてすぐれた人物は、同じ国内のすぐれた人物を友とし、天下のすぐれた人物は、天下のすぐれた人物を友とする。天下のすぐれた人物を友としても満足できない場合は、さらに古の人を論評して友とする。古の人が作った詩を吟じ、その人が書いた著作を読んだとしても、その人物についてよく知らないままではいけない。そこで、その人の生きた時代について論じる。歴史と時代背景を知る必要があるからである。これが「尚友」というものである。

佩川の序文の冒頭部分は、孟子のこの言説をふまえて、次のことを述べる。天下のすぐれた人物が、古の人を友とするのは、なぜか。そのことを、これから説いていく。たしかに同じ郷内の人と交わるだけでは、視野が狭くなり物足りない。しかし他郷、他国、海外など遠くの人たちの事蹟を、ただ風聞で学ぶよりは、まず郷内（多久）の先人たちの善言・善行から薫陶を受けた方が、より身にしみ、感化も大きいのである。

これは前回の記事で紹介したように、当時十八歳の長男廉（船山）がさまざまな書籍を読みあさっているものの、その内容が中国の古代のものであるゆえに、ただ漫然として読んでいるだけで、意味を深く理解していないことをふまえての発言である。

そのような船山と郷里の他の若者たちに読ませるために、佩川はより身近な題材、つまり多久の先人

たちの善言・善行を一冊にまとめたのである。それが『山野一善』である。

附言（凡例）

見出しに「附言七則」とあるが、県図本と尾形本には六則しかなく、草稿本にあった最後の一則が推敲の段階で削られている（図3）。県図本と尾形本を草稿本と比較すると、ほかの部分も大幅に修正されており、県図本と尾形本こそ佩川が推敲を重ねて世に送り出した定稿に近いものと判断されるので、本人が削除した一則をわざわざ補うことはしない。

○人の善を称うるに、其の父兄宗族に及べば、君子は以て厚しと為す。此の編、君徳（君主の徳）を以て託始（始めと）するは、他無く、下の視效する所なればなり。如し濫りに深山の野人を以て概論すと曰えば、則ち韡（佩川の名）に罪有るかな。

（原漢文、以下同じ）

（大意）人の善言・善行を称えるに際して、その父兄や一族にまで言及すれば、君子はそれで充分であるとする。本書が歴代領主たちの事蹟を巻頭に載せるのは、他でもなく、民がその徳を見て習うからである。もし領主のことを深山の野人と同様に論じているというならば、それはわたし佩川に罪があろう。

○元和以前、兵革未だ熄まず。当時の邑の智名勇功、豈に湮滅して聞こえざる者無からんや。降りて寛永年間に迨び、天叟（多久安順）、愚渓（多久茂辰）の二君、島原の役に、主卒共に功有り。具さに『事略』及び家臣系譜等の書に載す。故に此の編の収むる所、天和、貞享より今に至り、棺を蓋うを以て限りと為す。宗族の孝弟を称え、師友の徳義を存うること有りと雖も、其の未だ棺を蓋わざる者は則ち録さず。唯れ其の名の未だ定まらずして取るは、誤いを近づけ、疏きを捨つるが故に、姑く嫌いを避くるが為なるのみ。

（大意）元和以前は、まだ戦乱が終息しておらず、当時の多久の智者・勇者のうち、事跡が湮滅してこんにちは名も知られていない人物もいる。時代が下って寛永年間に至り、多久安順と多久茂辰の二君のとき、島原の乱が起き、主君・兵卒ともに手柄を立てた。これらのことは『水江事略』と『水江臣記』等の書に載っている。だから本書に収めるのは、天和（一六八一～一六八三）、貞享（一六八四～一六八七）から現在までであり、亡くなった人を下限とする。たとえ一族からその孝弟（親に孝行し、兄弟と仲良くすること）を褒め称えられ、師や友人からその徳義を認められているとしても、存命中の人は収録しない。人間は棺桶の蓋が閉まってのち、はじめて真の評価が定まる。真の評価が定まる前に収録すれば、へつらう人間を近づけて、親しくない人を切り捨てることになるので、その嫌疑を避けるためである。

○孝弟の行い、往々にして貧賤の間に著る。其の自らの禄（俸給）の以て耕すに代うるに足る者以上は、則ち寥たり。況んや所謂身を立てて道を行い、名を揚げて以て父母を顕らかにする者に於いてをや。夫れ孝弟力田を以て慶賞を蒙る者は、『善行録』有りて吏局及び庠中に蔵す。故に略す。

（大意）親に孝行し兄弟と仲良くする行いは、往々にして貧賤の人の間に現れる。俸給が充分あって耕作を行う必要のない階層以上には、きわめて少ない。ましてや立身出世し名を成して、父母の名を世に知らしめた人においては、なおさらである。目上の人によく仕え、耕作に勉めたことで褒賞を受けた人は、『善行録』に収録されており、『善行録』は役所と東原庠舎に蔵されている。だから本書では略する。

○郷閭の士気、今見る所を以て、諸れを幼時に比ぶれば、則ち及ばざるもの有り。之れを聞く所に較ぶれば、則ち及ばざること亦た甚だし。苟しくも是くの如くして、奮励すること無ければ、之れを陵夷（物事が衰えすたれる）と謂う。何ぞや。古の人は世に阿らず、故に能く畸節（独特な節操）を存す。而れども今や或いは是れ之れ亡びん。古の人は財利を賤しむ。故に能く貧を守る。而れども今は往々にして弱すれば斯に濫る。故に此の編、多く窮貧畸僻より取るもの有り。敢えて自ら党するに非ざるなり。

（大意）郷里の士気は、いま見るところを、わたしの幼い頃に比べると、あの頃には及ばない。噂で聞くもっと古い時代に比べると、はるかに及ばない。このままで、奮励しなければ、衰えすたれるしかない。なぜか。古の人は世間に迎合しなかった。だから独特な節操をもっていた。しかし今はそれが亡んでしまったのかもしれない。古の人は財と利を軽んじた。だから貧しくても平気だった。しかし今は往々にして窮乏すれば自暴自棄になり、道にはずれた行ないをする。だから本書は貧困者、偏屈者の中から

多く選んでいる。こんにちの郷里の士風には感心しないのである。

○匹夫、匹婦の諒を為すも、亦た或いは取るべきものの有り。則ち其の能く耕織に勤むるが如きは、豈に一善に非ずと曰わんや。児輩は暖姝にして、習に稼穡の艱難を知らざれば、宜しく辛苦労勤の事を攀きて、以て其の逸志を警むべし。余、嘗て勧農の事に与り、時に『兎園小録』を著す。故に今多くはせず。又た附す所の緇流（僧侶）の事の如きは、亦た所謂「他山の石」なるのみ。

（大意）身分の低い人たちの誠にも、また取るべきものがある。彼らが田畑を耕し、機を織る行いも、一善である。子供たちは自分に甘くて、普段、農作業の大変さを知らないので、辛苦労勤のことを引いて、その自由気ままな心を戒めることができる。私はかつて勧農（農業をすすめ励ますこと）の仕事に携わったことがあり、そのとき『兎園小録』を書いた。だから本書では多くは記さない。また巻末に附す僧侶のことは、参考にすればよい。

○承平の世、苟しくも斯文に由らざれば、則ち以て其の才気の発越を見ゆる莫し。故に編中に多く文学の士を挙げ、武勇の説に乏し。此れ吾が好む所に阿りて然るに非ざるなり。

（大意）平和の時代においては、儒学によらなければ、その人の才気の鋭さをさとることができない。だから本書には儒学者の話が多く、武勇伝は少ない。けっしてわたしの好みに合わせてこうなったわけではない。

以上、本稿では県図本に欠けている序文の冒頭部分と凡例にあたる「附言」について確認した。次回、続けて本文について紹介する。

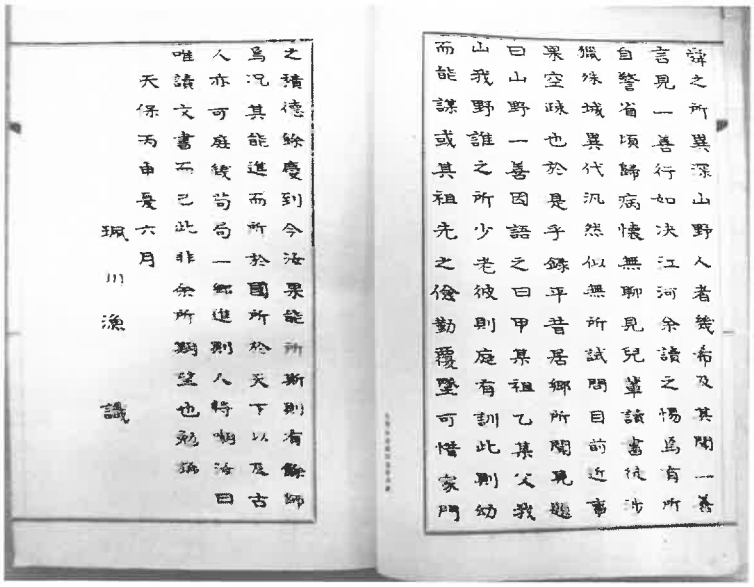


図１　『山野一善』（佐賀県立図書館蔵）

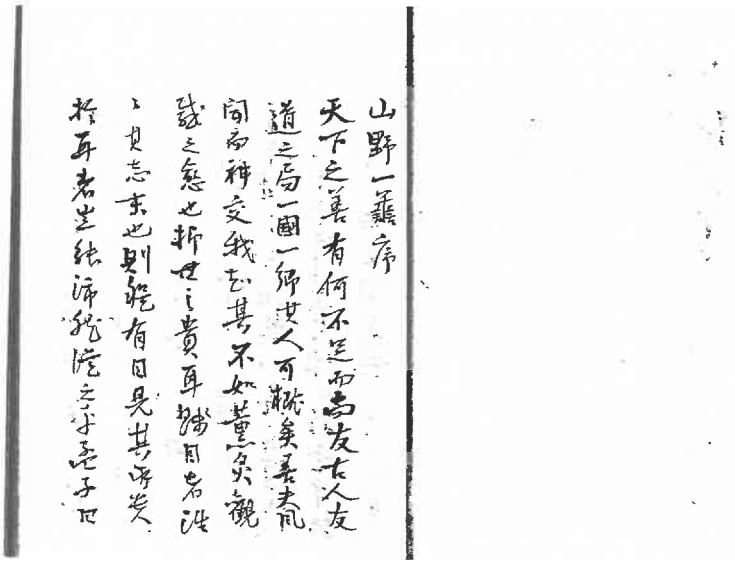


図２　『山野一善』（個人蔵）

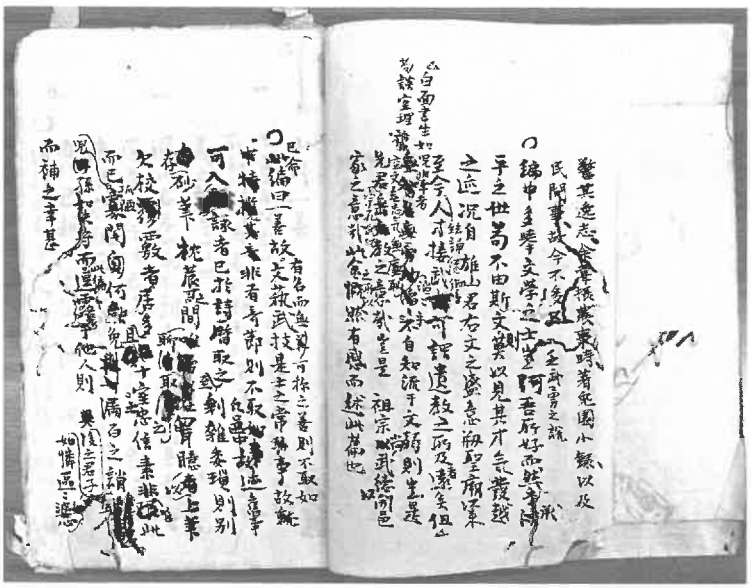


図３　『山野一善』（多久市郷土資料館蔵）

華表を仰ぐ

多久市郷土資料館長　藤井　伸幸

神社に参詣する時、決って頭を下げ通り抜けていた鳥居。その鳥居を見上げると、荒れた石肌に今も残る文字の数々。一体何が刻まれているのか。風雪に耐えた文字を読み取り記録に残すことを第一義に考え、余力があれば読み解いてみたい、というのがこの稿の趣旨です。

第一回　北多久町中尾神社の鳥居

〔應用無度　曼轉願輪〕

中尾神社は、多久市北多久町多久原を東西に走る国道２０３号に接し、その北側に位置しています。『丹邱邑誌』（多久の儒学者深江順房が江戸後期に執筆編集した多久の地誌）によれば、「祇園社〔中ハ素盞嗚尊　東八王子五男三女　西ハ稲田姫ノ十躰也〕多久原宿上ニアリ…愚溪府君京都祇園神ヲ御勧請…社僧山伏宝持院社地ノ内ニ住ス　京ヨリ直ニ御勧請ユヘ小城祇園社ノ指揮ニ係ラザル也」とあります。

『丹邱邑誌』によれば、中尾神社は江戸後期に祇園社と呼ばれていたことが分かります。二代領主多久茂辰（愚溪府君）が京都の祇園神を直々に多久原の地に勧請したため、近隣では名の通った小城の祇園社の管轄には入らないと書いています。社職は、社僧で山伏の宝持院が敷地内に住み込み担当したと記しています。

さて、中尾神社には国道を挟み南北に二基の鳥居があります。ここに紹介するのは国道北側の一基に刻まれた銘文です。※国道南の鳥居は明治三十八年に建立されています。

中尾神社鳥居（国道北側）

（神殿に向かい右の柱の銘文）

銘曰

瑞耀所照　神德旌眞
彝阜年穀　浩安國民
蠲去業置　證得福因
應用無度　曼轉願輪

□内は残存する字画から推定した文字です。

當領主多久美作守藤原茂明嫡子出雲守藤原茂堯
肥之洲小城縣多久原祇園宮石華表二柱

銘文は概ね次のように書き下すことができますが、正しい読みは不明です。

瑞耀の照る所　神德は眞を旌す
彝に年穀を阜にし　浩く國民を安ず
業置を蠲去して　福因を證得す
応用は無度　願輪を曼轉す

現代語訳の案は次のとおりです。

めでたく光り輝く場所（この祇園社）、その神の御利益こそ神の真を表しています。毎年、穀物を豊かに実らせ、領民の生活を大いに安心させます。生活の貧しさはなくなり、神への善行により功徳を受けることができます。神の救済は時と場所に関わらずあり、誓願の輪をあまねく廻らせます。（注一）

神に捧げる文ですが、神と言う字を除けば、背景には仏教的素養が感じられます。銘文を起草した人物の記載は鳥居にありませんが、中尾神社の社職を担当した「社僧」（上記『丹邱邑誌』）という語句が、それを物語っています。神仏習合の一面が分かる事例です。

続く銘文は、鳥居の設置に関与し了承した人物で、当時の六代領主美作守多久茂明の嫡子出雲守藤原茂堯です。歴代多久家の事蹟を記した『水江事略』によれば、享保十六年六月に「半元服ノ礼ヲ行ハレ且御通称ヲ出雲ト改メラル」とあります。当該鳥居は、左の柱の銘文により享保十三年二月に建立されていますので、この『水江事略』の記載より三年前には「出雲」と名乗っていたことになります。また、「肥之洲小城縣」と刻まれていますが、小城郡多久縣と刻まれた鳥居の例もあります。「石華表二柱」は、石製の二本柱の鳥居一基と考えられます。

（神殿に向かい左の柱の銘文）

岁享保十三年歳次戊申二月彼岸吉日
宮司　實持院朝源
建立施主　氏子中
石工　野田善七信安

「岁」は年号の頭に付ける文字で「ジ」又は「とき」と読み、「歳次」は干支の頭に付ける文字で「サイジ」と読みます。享保十三年戊申（つちのえさる）歳で、西暦１７２８年です。続いて、二月彼岸吉日で、旧暦二月（新暦三月）の彼岸日に建立されたことになります。（注二）

宮司は實持院とあり、上述『丹邱邑誌』によれば、「宝持院多久原村ニアリ祇園社社務…二世朝源権律師」とあります。『丹邱邑誌』の最終編集年と鳥居建立年は約１２０年の開きはありますが、両者の記載は一致します。「建立施主氏子中」は、鳥居を建立し功徳を行った方々で、「中」は「じゅう」と読み、集まった信仰者（氏子）の仲間（講）です。石工は野田善七信安と記載され、多久領内の石工と考えられますが、この人名が刻まれた類例は、現時点ではありません。

鳥居写真の額束（がくづか）には「八坂神社」と刻まれていますが、江戸時代には「祇園社」と呼ばれていました（上述）。中尾神社境内には「祇園宮」と刻まれた額束が保存され、これが江戸時代に掲げられていた額束と考えられます。全国にある祇園社の多くは、慶応四（明治元）年の神仏分離令により改名されていますので、中尾神社にある「八坂神社」の額束も、神仏分離令以降に安置されたと考えられます。なお、境内には「中尾神社」と刻まれた額束も保存されていますが、中尾は字名に由来する名称と考えられます。いつの時代に使用された額束なのかは不明です。

（注一）漢文の書き下し文や現代語訳は、西牟田明徳氏（元県立高等学校長）の助言を得ました。

（注二）この頃に使用された暦の彼岸日は平（恒）気法により計算されていたため、春分の日から二日後が彼岸の入りで七日間ありました。［国史大辞典「彼岸」国立天文台「二十四節気の定め方」］

めでたい孝行―草場佩川『婆心帖』と古伊万里

佐賀県立九州陶磁文化館　芳野　貴典

天保九年（一八三八）九月十八日、佐賀城下の勢屯という場所に教導所が開設された。教導所とは佐賀藩が城下の数か所に加え遠くは有田皿山にも設置した市中教化のための教育機関である。記念すべき最初の講義を担当したのは草場佩川であった。この日の佩川の日記には「勢屯教導所開講孝経、爾後、日往看詳教学事、…諸吏里長等至、児輩三十数名」（『草場珮川日記』下）とあり、藩内随一の硯儒の謦咳に接すべく諸役人や町衆、そして三十名を超える子どもたちが集ったことが分かる。この時講じられたのは『孝経』であった。『孝経』は勢屯に限らず他の教導所でも基本テキストとして用いられた。当時、青年藩主であった鍋島直正は「家中は勿論一国下民に至迄、当家国初之風に復し、忠孝・文武を励し、礼儀・廉恥・質樸・勤倹之風行れ」（『直正公譜』二　天保七年十二月十二日）ることを目指していたことから、孝の教えを説くことに特に力を入れたものであろう。

孝重視の姿勢は佩川の著作『婆心帖』にも見える。『婆心帖』は嘉永三年（一八五〇）に教導所の熱心な生徒の一人、材木町住の釜屋西村規謙に請われて編まれたものである。冒頭には佩川と文事を通じて親交のあった八代蓮池藩主鍋島直与が「よみつつも恵わするなたらちねのははのちふさにまさる言の葉」という和歌を寄せている。絵筆に巧みであった佩川らしく随所に愛嬌ある絵が挿入され、また、和歌を用いて教えを説いているのは庶民教育の常套手段であるが、幼い頃父を亡くし母から和歌を口授された佩川の学びの原風景を思い起こさせる。『孝経』に触れた箇所でも原典を詳解するのではなく、日本の年中行事や信仰習俗に事寄せて要諦を分かりやすく伝えようとしている。

『婆心帖』の第八「雪の筍　氷裂鯉雀」は、二十四孝のうち孟宗と王祥の逸話を和歌に詠みつつ絵入りで紹介したものである（写真１参照）。二十四孝は古代から中国に伝わる二十四の孝子説話の総称。日本では中世後期から諸版本が相次いで舶来した。とりわけ元の郭居敬『全相二十四孝詩選』（以下、詩選）の明刊本がもたらされて以降、国内で盛んに書写され注釈が加えられた。『御伽草子』で取り上げられるなど和文化が進むとともに、画題としても好まれ、狩野派は元信・松栄・永徳の時代に二十四孝図を積極的に描いた。近世には翻案が相次ぎ浅井了意『大倭二十四孝』、浄瑠璃「本朝二十四孝」、井原西鶴『本朝廿四不孝』などが書かれた。したがって、江戸時代、少なくとも佩川と同時代までの人々にとって二十四孝はよく知られた話であった。

孝経の第一義を晋の孟恭武といふ人の事によせて。「伝らじのみの笠きつつ孝にこるこころぞ深き雪の竹の子」。又かの王祥も世に伝ふる二十四人の内にて雀飛鯉踊るといふ孝感のしるし上と下とにあきらかなりとやいはむ。「これぞこのおやにすすめのあぶりものこひねかふ子は氷さへとく」。

「孝経の第一義」とは『孝経』の第一章である開宗明義章を指すと思われる。孝が徳の根本であることを述べた章で、序文的な性格を持つ。教導所での『孝経』講義の一コマ目で、生徒たちにおなじみの孟宗と王祥の逸話を引き合いに出したということなのだろう。和歌は二人の親を思う心の深さを詠んだもの。雪中竹に蓑笠姿の人物と氷裂に鯉の絵も当時の人は一見して孟宗と王祥のことであると理解したに違いない。

孟宗は竹の種名としてもよく知られる呉の政治家である。恭武は字。『詩選』によると彼の孝行は次のとおりであった（引用にあたり詩は読み下した）。

涙滴て朔風寒し。瀟々たる竹数竿。須臾春筍出づ。天意平安を報ず。

孟宗字は恭武、母年老て病篤し。多月筍食を思ふ。宗竹林の中に往て竹に泣て天に告ぐ。頃ありて地上に筍数茎を出す。持帰て羹を作り母に供す。食し畢て病愈ゆ。

病を得た老母が冬に筍を食べたいと言った。そこで孟宗は竹林に行ったものの、当然見つからない。泣きながら天に祈り雪を掘っていたところ、雪が融けて土中から筍が沢山出て来た。筍を持ち帰り、羹にして母に食べさせるとたちまち病は癒えた。

王祥は魏・晋の政治家。『詩選』には孟宗を上回る過酷な孝行譚が載る。

継母人間に有り。王祥天下に無し。今に至て川水の上、一片臥氷の模あり。

王祥魏時の人なり。早く母を喪ふ。継母朱氏慈しまず、数之を譖ふ。是に由り愛を父母に失ふ。常に生魚を食さんと欲す。時天寒く氷凍る。祥氷を剖き之を求む。氷忽ち自解け双鯉踊り出づ。持帰て母に供す。氷凍天寒き毎に人形の氷上に臥す有り。今に肇慶府に在り。

王祥は早くに母を喪い、継母からはひどい扱いを受けていた。真冬に魚を食べたいという継母のため池に出かけたが水面は凍っている。服を脱いで氷の上に臥したところ、たちまち融けて二匹の鯉が飛び出たのでそれを持ち帰って継母に食べさせた。今でも肇慶府の池では冬に水が凍ると臥した人の形が現れるという。『婆心帖』では『詩選』には見えない継母のために雀を捕える話にも触れている。

二つの逸話を比べると、孝を尽くす対象が実母か継母かの違いはあるものの、本来冬には入手不能であるはずの食物を篤い孝心によって手に入れるという共通性が見いだせる。孝行者が天を感動させ奇跡を起こしたわけである。

ところで、二十四孝がしばしば絵画化されたのは、教訓を垂れることばかりが目的ではなかった。近世の日本で二十四孝図を好んで描いたものに肥前磁器、すなわち古伊万里が挙げられる（写真2、3参照）。早いものでは十七世紀半ば頃の製品に見られ、十七世紀後半から十八世紀にかけては型打ち成形の白磁皿で図を陽刻で表したものが確認できる。よく登場する人物は、天が遣わした織姫と結ばれた董永、猛虎から生命を守った楊香、象と鳥に耕作を助けてもらった舜、そして孟宗と王祥である。

器の文様としてこれらが好まれたのは、なにも使い手に孝行を勧めるためではなく、孝心がもたらした出来事（真冬に筍や凍った池の鯉を手に入れるなど）に吉祥性が感じられたためである。福沢諭吉は二十四孝を批判した際に王祥の逸話の不可能性を槍玉に上げたが、現実離れしていればいるほど吉祥性は増す。

『孝経』を講じるにあたり二十四孝を媒介させた佩川。孝心はかくも深くあり得るということを伝える方便は、同時に孝行のめでたい効用を説く方便でもあった。

写真1　『婆心帖』個人蔵

写真2　染付雪輪筍掘人物文輪花皿
佐賀県立九州陶磁文化館蔵
柴田夫妻コレクション

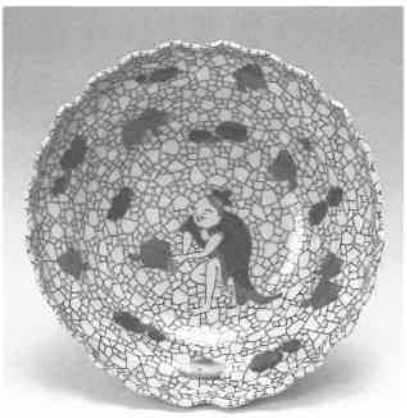


写真3　染付魚唐人氷裂文輪花皿
佐賀県立九州陶磁文化館蔵
柴田夫妻コレクション

【参考文献】
- 稲畑ルミ子、一九九三、「二十四図考」、奈良県立美術館編『奈良県立美術館紀要』第八号
- 大橋康二、一九九九、「二十四孝と伊万里」、『目の眼』
- 尾形善郎、二〇〇七、「草場佩川著『婆心帖』考」、『葉隠研究』第六三号、「葉隠研究」編集委員会
- 佐賀県立博物館・多久市教育委員会、『没後一五〇年　草場佩川』
- 『婆心帖』を読む会、二〇一六、『草場佩川著「婆心帖」』、多久市教育委員会
- 三好不二雄・嘉子、一九八〇、『草場珮川日記』、財団法人西日本文化協会

『附驥日録　東』の上梓に至るまで

草場佩川の会会長　桑原　峰俊

1.『附驥日録　東』上梓に関わって

（一）上梓に至るまで

『附驥日録　東』（以下「東」）は、思えば平成二十八年二月十一日から多久市郷土資料館での同書の読み合わせが始まりである。まもなく人数も増え、場所も「あいぱれっと」に移し、月一回の読み合わせ会が続く。「東」を読み終えると『豆腐湯』（難解であることもあり中断）、『附驥日記　西』と続き、令和元年から二年にかけて『対礼余藻　筆語上（一）』、令和三年から四年にかけて『山野一善』（「東」上梓準備のため途中まで）と読み進めてきた。

新型コロナウイルス感染拡大の影響でしばしば中断を余儀なくされたが、会の新たな目標である「東」上梓のため準備を進めてきた尾形恵子氏作成の草稿を、会として丁寧に読み進めながら本格的に印刷への準備に取り掛かった。予算が乏しいため出来ることはなるべく手作りでという方針で。本文の体裁を整えながら、同時に印刷用紙を決めていく。ネット探索を重ねて製本に相応しい用紙が決まる。読みやすくするためには文中に挿し絵が欲しい。あれこれと検討、最終的には「婆心帖」（注1）からの引用に。表紙についても検討を重ねる。表紙絵については、この書の象徴的なものをと、（江戸への）「途はここから始まった」当の場所である「椋の瀬橋」の絵（注2）が最も相応しいと、これに決まった。こうして、製本への準備がほぼ整った。

令和四年八月、その原稿を持って、会員でもある佐賀県立博物館館長の福井尚寿氏に「序文」の執筆依頼に行く。その原稿を待ち、会では次の目標である『附驥日記　西』の上梓への準備を進めていった。翌年一月、福井氏から『附驥日録　東』の原本が多久市郷土資料館に所蔵されている、是非現物を見たいと。資料館と連絡を取り、一月十八日に福井氏来訪。原本を借りて、福井氏は丁寧に写真を撮る。

そして三月十九日感動の瞬間が！　尾形氏宛てに届いた福井氏からの二つのメール。その一つを小生にも転送してくれた。「草場佩川の『附驥日録　東』について」と題する福井氏の寄稿文は、問題提起を含めた学術論文的な内容であった。今一つは後日の読み合わせ会で頂いたもの。それは何と、『附驥日録　東』原本の「翻刻版」。会員一同手にして更に感動、短期日の間にここまでやり遂げてくれた福井氏への感謝の気持ちが一杯に拡がった。

さて、準備万端、製本の準備に取り掛かる。製本に当たっては、原稿の印刷は会でやること、それを印刷所に送り、表紙・背表紙印刷など「製本」をお願いすることにする。四月二十日、佐賀のアバンセで印刷を済ませ、まもなく印刷所に送付。その後石州印刷は、会の要望を受け止めて実に丁寧な仕事をしていただいた。

そして遂に五月二十四日、『附驥日録　東』の上梓なる！　…仲間と地道に取り組んできた仕事がこうして陽の目を浴びることとなった。

六月三日、東原庠舎で「草場佩川の会」例会及び福井尚寿氏による（出版記念）講演会を開催した。

また佐賀新聞はタイムリーにこの日「佩川の旅日記、現代語版の出版」と題して、出版に至る経緯、当日の（出版）披露会のことなどを紹介してくれた。

（二）問題の提起

（1）三好嘉子氏『草場珮川日記』（以下「日記」）解説から

この稿を起こすに当たって、私は三好氏の「日記」（上巻）「解説」を、何か背筋が伸びる思いで読み返していた。三好氏のお仕事、ー原本を手にして書写、校注・解題を進めて一冊の本とするー想像するに膨大なエネルギーを費やして。そのことの大変さが改めて実感できるような気がして来たからである。

（2）上梓に際し福井氏に関わって頂いたこと

①序文に相当する**「草場佩川の『附驥日録　東』（以下「東」）について」の執筆**。内容は佩川及び「東」についての簡潔・明瞭な紹介と**問題点の提起**。

②**『附驥日録　東』原本の翻刻**（三好氏版に続く貴重な原本の翻刻）

③六月三日、「草場佩川の会」（於東原庠舎）例会での（記念）講演。演題は「草場佩川の『附驥日録　東』について　ー著作時期とその背景をさぐるー」。分かり易い講演であった。↓更に講演で使用されたデータをその後メールで会に送付頂いたこと。

（3）そこで問題の提起

①「東上の一冊」は「異筆」

三好氏は「日記」（上巻）「解説」の中で、「まとめられた東上の一冊は㊀の体裁で**異筆**」であり、それは天保七年九月廿三日の「日記」に「**長男船山にまとめさせた**」旨を記しているから、と。

傍線部は、「日記」(下巻)・「丙申（天保七年）日記」中、九月廿三日・「**廉謄完附驥日録東一篇**」を指す。廉（船山）が「東一篇」を「謄」(写す。書き写す）したことを指している。

②これについての福井氏の異論

「謄」は書き写しにすぎず、「長男船山にまとめさせた」とは言いがたい。（中略）佩川の他の著作と比較しても、佩川自身による筆写本である可能性が高いと考える」と指摘。

③今後の課題

敬愛するお二人の意見は、今後も比較検証の必要があるのではないか。

2.『附驥日録　東』(以降「旅日記」）を読む

（1）旅立ちまで

「旅日記」の冒頭は「文化八年辛未（一八一一）、朝鮮王の使者勉求が招聘されて対馬に至った」で始まる。今回は（江戸ではなく）対馬での信使聘礼。使節団の一員に師古賀精里が選ばれ、精里は佩川を随員の一人に選んだ。願ってもない機会に佩川は喜び…。「対馬（馬島）、千里を走る驥の如き存在である先生に附いて私は対馬に行く。そうだ附驥、私は驥に附いて行くのだ。」と佩川は決意を固める。

対馬随行を決心したあとの母とのやり取りも心に響く。

―数日前、多久に戻った時母から「俗に鷹の夢は吉兆だというけれど、何を喜んだらいいのやら」と母、すかさず佩川、「朝鮮土産の名鷹で、名前は海東青ですよ」と。

―主君茂鄰の許可も下り、旅の準備も一通り済ました佩川。出発を前にした母とのやりとり、「あのハヤブサが吉兆になるかどうかはそなたの努力にかかっている」と厳しくも、優しい言葉。

（2）旅立ち―若き佩川が多久から江戸に向かういわば「旅日記」です。ここでは旅「五話」を紹介します。みなさんもどうぞ、地図を片手に佩川と共に旅を楽しんでください。

〈第一話〉椋の瀬橋から―十月廿一日、椋の瀬橋で見送りの人たちと別れを交わし、いよいよ（江戸への）途は始まる。数日佐賀で過ごし、主君茂鄰ご夫妻、古賀穀堂をはじめ、多くの知人と別れの挨拶を済ます。十月廿五日、佐賀を立つ。江戸までの同行の士は桐野山妙覚寺の僧良弁と小僧の孝太である。

〈第二話〉大宰府で―管公への想いひとしきり。「かつて公が渤海の大使と交流した折、大使は公の学識に心酔し、その文章を白楽天とも比して褒め称えた。」まるで神の声が聞こえてくるようだと、きたるべき（対馬での）漢詩の応酬への覚悟が伝わる。

〈第三話〉鞆の浦で―鞆の浦福禅寺の対潮楼は信使三役の迎賓館とされ、一七一一年の信使李邦彦（イパンオン）は「日東第一形勝」と、ここからの景観を称えた。佩川は鞆の浦の酒「保命酒」(ほうめいしゅ）についても触れている。来聘の信使一団には保命酒も振舞われ、その名が知られていたようである。

〈第四話〉浪華で―天満街の客舎で菅茶山には書簡、古賀朝暘（江戸藩邸）には行李を届ける。篠崎小竹と三島老父子の在所（梅花社）での詩会。杯は止まず、筆戦はまさにたけなわ…。小倉での「赤壁の遊び」に続く、とても楽しい詩会だったようである。

〈第五話〉品河、江戸桜田藩邸に着く―

盟友仲安(古賀朝陽)と再会、歓迎を受ける。じっくりと飲み交わす酒は五臓六腑にしみわたり、尽きぬ旅の話に夜も更ける…、安堵のときを過ごしたに違いない。

長い旅を共に過ごしてきた良弁とはここで別れる。良弁は、川越の仙波喜多院の学寮に入り、学問と修業を続ける。

十一月廿八日　昌平坂学問所へ赴き、精里老先生及び令息侗庵先生に拝謁する。―ついに旅は終わる。

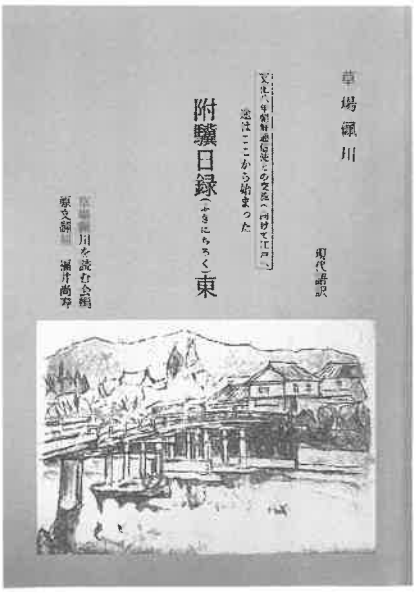
〈脚注〉

（注1）「婆心帖」は佩川六十四歳の時の著書。多久市では平成二十八年に「草場佩川著『婆心帖』活字体版」(『婆心帖』を読む会・編集　発行者：多久市教育委員会）が発行された。

（注2）昭和五十年代の椋の瀬橋。この絵は、多久市の画家・(故）富永定男氏作のもの。市内の旅館富亀和荘のかつてのご主人。

3. 終わりに

どの日付でもよい、読み始めると、行く先々での故事来歴の紹介、引用の自在さ、描写の巧みさ、思わず引き込まれますね。次は対馬へ。どういう旅になるか、『附驥日記　西』をご期待ください。



多久家文書
『水江事略』（翻刻文）紹介 12
公益財団法人 孔子の里 理事 服部政昭

水江事略巻之六

安順公譜之上

永禄七年癸亥ヨリ
天正十六年戊子ニ至ル

水江龍造寺第五世長門守安順公御法名天叟浄祐
菴主永禄六年癸亥水江東の舘ニテ御誕生
東の舘ハ金公ノ御隠居ノ御舘ニシテ家純公周
家公御相傳ノ宅地ナリ隆信公長信公モ此所ニ
テ御誕生慶聞尼ノ常ニ御住居ノ所ナリ家純公
天神社ヲ御勧請有シニ依テ天神屋敷ト云
御父ハ長信公御母ハ芳岩夫人蓮池ノ城主小田駿
河守政光ノ御息女ナリ公御幼名彦仁王又六郎次
郎御元服有テ與兵衛尉後長門守ト称セラル實名
初賢康又家久後安順ト改メラル

元亀元年庚午　御年八歳
八月二十一日御父長信公今山御出陣大利ヲ得ラ
ル同二十二日多久御陣梶峰城攻御勲功有直ニ御
入城是ヲ守ラル九月多久ニ封セラレ御家臣以下
數百人ヲ率ヒテ御入部有公御母堂ト共ニ多久御
入城ナリ

天正三年乙亥　御年十三歳
御元服六郎次郎君ト称セラル御名乗賢康公隆公
御加冠ニテ世子ノ御諱賢ノ一字ヲ賜ハル
鎮賢ハ隆公ノ世子政家公初ノ御實名ナリ其時
ハ太郎四郎君ト申セシ
六郎次郎ハ御祖父周家公ノ御名ヲ取ラレ御實名
ノ康ハ御先祖正公ノ御一字ヲ取リ斯ハ名付玉フ
是水江ノ御惣領ニ立玉フカ故ナリ

同六年戊寅　御年十六歳
十一月隆公筑後ニ発向セラル長信公多久ノ兵ヲ
率ヒテ御馬ヲ出サル公御願ヒニテ依テ御供成サ
ル是御初陣ナリ黒木城攻ノ先登ニ進マレ御進退
常々ナラス隆公甚御賞美遊ハサル御手ニ從フ篠
河忠尊成富與六左衛門等戰功ヲ現ハシ首數級ヲ
得ル

同七年己卯　御年十七歳
十一月筑後上下ノ國衆龍造寺ニ從フニ依テ隆公
御凱陣公モ亦御供ニテ御歸國ナリ

同八年庚辰　御年十八歳
正月二日隆公筑前ヲ征セラル長信公下総守康房
ヲ御陣代トシテ差越サル筑前平均ニ依テ諸軍國
ニ歸ル
今年須古城普請成就ス

同九年辛巳　御年十九歳
正月隆公龍造寺ノ城ヲ世子政家公（**時ニ民部太輔**）ニ御譲有テ須古ノ城ニ移ラル
四月上旬政家公分國ノ兵三万餘騎ヲ率ヒテ肥後
ノ國ニ御発向公御一手ノ兵ヲ率ヒテ御出馬下総
守士卒ノ長トシテ公ノ御後見タリ政家公不日ニ
肥後ノ國ヲ治テ御歸陣有

同十年壬子　御年二十歳
政家公ニ請ハレ御實名賢康ヲ家久ト改メラル
今年隆信公ノ御姫松浦ノ波多三河守守親ニ嫁セ
ラル先多久ニ御入夫ヨリ貴志岳ノ城ニ御入輿ナ
リ
秋ノ比政家公大軍ヲ発シテ筑後ノ田尻ヲ征セラ
レ高尾ノ城ヲ圍マル公長信公御同前御馬ヲ出サ
ル
或記ニ云天正八年春山鹿ノ城主隈部但馬守親
永長臣有働外記ヲ使トシテ龍造寺ニ遣ス是ハ
肥後國ヲ隆信公ノ手ニ入レンカ為ナリ隆信大
ニ悦ヒ則白銀百枚太刀一腰ヲ親永ニ贈リ鞍置
馬一疋ヲ外記ニ賜フ同秋江上家種後藤家信多
久中務太輔ヲ大将トシテ犬塚馬場カ輩ト共ニ
都合其兵五千餘七月晦日肥後國山鹿ニ着陣ス
翌八月朔日菊池ノ城主赤星ヲ攻ム同九月上旬
隆信筑後ニ発向シ住吉ニ在陣ス時ニ當手ノ大
将龍造寺家治多久與兵衛八千餘兵ヲ率ヒテ田
尻監種カ高尾ノ城ヲ攻ムル事二十餘日ニ及フ
ト云々同十年夏隆公筑後ノ松延ニ在テ軍ヲ肥
後ニ遣ル大将ニハ後藤神代熊代馬場高木太田
賀の江横岳八戸犬塚有田内田本城須古多久波
多有馬大村松浦神埼筑後ニハ田尻黒木蒲池草
野等大軍ヲ駆催シ肥後國高瀬山鹿表ニ出陣ス
勝負ヲ島津ニ決センカ為ナリト云々

同十一年癸未　御年二十一歳
冬十一月田尻監種和平ヲ乞フテ城ヲ下ル諸軍歸
陣公御父子多久ニ御凱陣ナリ
今年高来有馬表ニ於テ龍家ノ軍薩ノ兵ト戰テ利
有有馬重テ救ヲ薩州ニ請フ
家系事績　有馬家種ヲシテ是ヲ糺明セシム深
江下野守安徳惟山家種ヲ迎接ス鍋嶋房重藤津
ヲ警固ス義純久屈シテ援兵ヲ嶋津ニ乞フ薩軍
海ヲ渡テ陣ヲ安徳ニ張ル新納武藏守伊集院肥
前椛山刑部谷山播磨河上左京間宮平馬福崎新
平等其兵五千深江ノ城ハ江上家種横岳家實馬

塲監周加番タリ八月朔日未明左京刑部平馬潛カニ深江ノ城ヲ伺フ城主下野守巡見シテ相逢フ則鑓ヲ合ス横岳古舘馳来テ平馬ヲ突殺シ小河常陸刑部ヲ討捕ル左京ハ漸逃ル我軍勝ニ乗テ薩陣ニ押寄ル敵強フシテ勝タス薩軍利ヲ得テ返ル

同十二年甲申春政家小河武藏守龍造寺下総守ヲシテ有馬ニ発向セシム江上家種横岳馬塲相會シテ其兵一萬餘高来ニ攻来ル有馬急ヲ嶋津ニ告ク昌久ヲ将トシテ練士三千来テ有馬ヲ援フ

同十三年甲申　　御年二十二歳

三月隆信公肥筑三州ノ兵四萬餘騎ヲ率シテ高木ニ御出陣有是ハ有馬氏嶋津ヲ引入レ我番兵ヲ劫カシテ威勢ニ募ルニ依テ其罪ヲ封シ玉フ所ナリ爰ニ於テ多久ノ兵ヲ取テ公ノ鎧刀ヲ塗隠シ漸ク相助テ海邊ニ到ル時ニ山口ノ郷司田嶋彦左衛門船ニ乗テ来ルニ出會フ

或説ニ云安順嶋原出陣ノ時暫ク山口ニ居リ田嶋カ家ヨリ爰ヲ以テ田嶋且ハ軍旅ヲ訪ヒ且ハ所勞ヲ尋ン為船ヲ仕立テ有馬ニ到ル味方ノ敗軍ヲ聞テアチコチト尋ネ廻リ漸ク出會フテ安順ヲ其船ニ乗セテ漕廻ルト云々

田嶋大ニ悦ヒテ其儘己カ船ニ載セ奉ル時ニ福地蔵人カ曰我モハヤ思ヒ置事ナシ早ク船ヲ出スベシ某ハ爰ニ留レテ討死シ君家ノ為ニ名ヲ後代ニ殘スベシ又咽輪ヲ解テ是ヲ成富ニ與ヘテ曰ク我此咽輪ハ誠ニ譯アルモノナリ亡父福地右衛門尉周家公ニ殉ヒ祇園原ニテ討死ノ時筐トシテ我ニ傳フ我當家ニ属スルノ印只此一物ニ在ルノミ我爰ヲ以テ世倅右衛門ニ授ント思フナリ御邊是ヲ傳ヘ玉ハラハ我大幸何事カ是ニ如ント云捨テ船ヲ離レ力戰シテ敵ヲ撃ツ數多ナリ其身モ又討死ス敗軍ノ諸士落来テ田嶋カ船ニ乗移ラントス彦左衛門並ニ公ノ近臣是ヲ突落シ射拂ヒ船ヲ漕出シテ難ナク山口ニ歸ル彦左衛門郷士七十餘人ヲ相催シ公ヲ守護シテ多久城ニ入レ時ニ當家ノ臣南里三郎左衛門尉石井源左衛門尉等康房トモドモ先陣ニ進ミ鑓ヲ振テ烈敷敵ニ當ル敵兵是カ為ニ辟易ス両人相言テ曰家久公後陣ニ在シテ無下に微勢ナリ是ニ属セスシテ叶フマシト両人後陣ヲサシテ引返ス敵六人逃スマシト追来ル両人及ヒ家人等取返是ヲ討ツ身モ又疵ヲ被ルヨフヨフニシテ海邊ニ到リ公ヲ尋ヌレトモ逢ハス既ニシテ田嶋カ船ニテ歸リ玉フ由ヲ聞ク両人一ツノ船ヲ奪取御跡ヲ慕フテ歸ル石井孫七郎ハ跡ニ残リ力戰シテ敵ヲ組打シテ首ヲ取ル八戸掃部證人タリ後日其働キノ次第ヲ直茂公ニ申上シカハ公其武勇ヲ感シテ御懇意ヲ加ヘ玉フト云々

夏秋ノ比豊後衆筑後ニ出張シ嶋津兵庫頭義弘又肥後ニ出張ス何レモ龍造寺ノ所領肥後ノ地ヲ取ランカ為ナリ太守政家公鍋嶋信昌公龍造寺家晴及諸家ノ軍ヲ遣ハシ是ヲ防カシム我公モ又多久ノ兵ヲ率ヒテ肥後ニ到リ其封彊ヲ守リ家晴ト共ニ南関ニ在陣セラル秋月種實扱ヒヲ入レ和平セシム爰ニオヒテ我公ハ急キ多久ニ御歸陣ナリ西方ノ御押ヘタルニ依テナリ

同十四年丙戌　　御年二十四歳

春太守政家公鍋嶋直茂公ト共ニ筑後ニ発向セラレ處々放火シテ敵地ヲ焼ク是嶋津ト御手切ノ御出陣ナリ我公モ又御出陣遊ハサル

九月龍造寺家ノ軍放火シテ三池ノ封内ヲ焼拂ヒ進テ肥後南関ニ陣ス我公モ又其列タリ政家公一ツノ功ヲ建テ豊臣秀吉公ニ通セラレントノ謀ナリ秀吉公小早川隆景黒田孝高ニ命シテ政家公及龍造寺一族頭々ノ人質ヲ求メシム政家公ハ御母堂ヲ質トシテ大坂ニ御登リ我公ノ質石井三右衛門尉鍋嶋平五郎（**直茂公ノ質**）ト共ニ長府ニ赴ク

同十五年丁亥　　御年二十五歳

豊臣殿下秀吉公諸國ノ兵十萬餘騎ヲ率シテ嶋津ヲ征セラル政家公御願ニ依テ御先陣タリ其兵三萬餘我公御一手ノ兵ヲ率ヒテ御出馬薩隅二州處々ノ役ニ御勲功有七月殿下九州ヲ治テ御歸洛アリ我公ハ多久ニ御歸陣

八月公梶峰城下ノ舘ニ於テ御婚礼アリ御室ハ直茂公ノ御姫（**御名千鶴君御年十六御母ハ陽泰院御勝茂公ノ御姉君彦鶴君也**）ナリ其地ハ後多久主膳正居宅ナリ（**子孫今ニ相続ス**）

今年秋冬ノ比肥後ニ一揆起ル隈部宇動カ徒ナリ政家公九國ノ諸将ト共ニ一揆追討ノ命ヲ蒙ラル諸家ノ軍多ク出陣ス多久ノ兵諸勢ト共ニ発向ス庭木右近允等物頭タリ龍造寺家晴（**諫早ノ領主**）手勢ヲ率ヒテ肥後ニ出陣ス然所ニ西郷信尚家晴ノ留守ヲ幸トシテ七浦ヨリ兵ヲ起シ諫早ニ発向ス不日ニ本城ヲ襲フテ是ヲ取ル家晴早速肥後ヨリ歸テ西郷ト戰テ利アリ

西郷ハ諫早ノ旧領主ナリ殿下薩州ヲ征シ玉フ時出陣延引ノ罰ニ依テ改易セラレ頃日七浦ニ蟄居ス

太守政家公我公及後藤家信藤津郡ノ郡士ヲシテ七浦ノ界ヲ守ラシム我公御一手ノ兵ヲ率ヒテ飯田ニ陣セラル

同十六年戊子　　御年二十六歳

春肥後ノ一揆敗績シ諫早モ又平均ス我公兵ヲ多久ニカエス

（以下　次号に続く）

聖廟資料49「覚」にみる多久聖廟落成と孔子像の遷座前夜（其の二）

多久市郷土資料館学芸員　山口佐和子

前回に引き続き「覚」の内容を見ていこう。

一、神壇一通脇壇一通都而室之間不残大工仕事七月中相澄候事

神壇一通り、脇壇一通り、本堂の正面奥、本堂よりも一段高くなった孔子像と四配の像を置く室（むろ）の間もすべて残らず七月中には大工仕事を済ませるとある。続いて、こうある。

一、当月六日七日間塗師屋孫兵衛松原源太夫両人共々此方召寄候様、明五日以飛脚申越候事

一、右両人被参候節八御厨夏園儀も同然聖堂に被罷出候様相達候事

この時点でまだ聖廟の内装は完成しておらず、六日から七日の間に塗師屋（ぬしや）を二人召し寄せるとある。塗師屋は漆塗りの職人の事で、聖廟内の装飾で、漆塗りのものを仕上げるために呼ばれたと考えられる。現在聖廟内で確認できる漆塗りの部分は、室の嵌板の紋様や高欄の四割菱の透かし彫り、室袖振の登り蕨手文などがある。後述の「覚」本文内では、「神壇其外都合ぬり之儀」と記されている。

また、塗師屋二人が来るときは、御厨夏園も同時に聖廟へ来るようにとの達しがあった。御厨夏園は多久家の家臣で、画業を狩野派に学んだ絵師であり、多久聖廟の天井板面に蟠龍を描いたことで知られる。当時は多久構内の西の原に居住していた。

一、室之間大工仕事当月中相澄候により差付額持きりん之間早速相仕廻、其外之仕事八出来合次第、只今之大工人数二而何とそ急二間二合候様仕候事

一、本堂一通りからはふ迄之惣仕廻・大工仕事、御遷坐之儀出来候而も相澄候、尤罷成候へは、御遷座前にも出来し候事

一、神壇其外都合ぬり之儀、かき合せ塗に可然事

さらに続けて、室之間の大工仕事が当月中に終ったので、早速額持ち麒麟の間にとりかかり、その他の仕事は出来合い次第、只今の大工の人数でなんとか急いで間に合わせるとある。そして本堂一通り唐破風までの総仕上げ・大工仕事は御遷座の後でもよいが出来るなら御遷座前に完成するようにとある。神壇は室の間にあり、そこに八角形の逗子「聖龕」を構え孔子像を安置する。神壇を掻き合わせ（素地に柿渋と弁柄とをまぜたものを塗り、その上に透漆を一回塗った簡易な塗り）にするように指示が出されている。

一、右は大都之詮議候、そこ〳〵ぬり様之儀は源太夫・孫兵衛六日七日間罷出候節、八郎右衛門、所左衛門方二罷出、尤六左衛門儀立入被致心遣、夏園も同然召寄、両人之塗手打込致僉議、そこそこ之ぬり様書付候而、杢允へも可被申聞候事

一、尤右被申聞之義、両人之ぬり手居候内、早々可被申聞候事

おおよその詮議をし、「そこそこぬり様之儀」のため塗師屋の源太夫と孫兵衛が出てくる時は、八郎右衛門は所左衛門（川浪道義）の所に罷り出、六郎左衛門は立ち会って心遣い（監督）をするとある。御厨夏園も同然に（心遣いとしてか）呼ばれ、それぞれの場所の塗様に付いて詮議し、書きつけたものを杢允（多久安成）にも報告するようにと命が出た。ここで夏園が呼ばれた理由としては自分の手掛けた天井画の事ではなく漆塗りの聖廟内装飾の関係であろうから、聖廟の美術を総合的に監督するような、アートディレクターのような役割を持っていたのだろうか。武富咸亮が釈菜にあたって「東原庠舎之釈菜」として上程した祝文には、「茂文公、僕の拙を措かず、堂殿の準規、階壇の彫刻を承当商量す。僕、其の厚志に感服して辞するを獲ず、図画して以て其の司に議す」とあり、咸亮が聖廟の彫刻図案を担当していたことが分かる。

二人の塗師がいるうちに、早く申し聞かせるようにとの言葉からも、八月の釈菜の日に合わせようとする焦りが見える。

一、右御遷坐前仕廻之儀付、大工其外今之人数より茂相増候八て不叶参懸候は所左衛門方六左衛門被致其僉儀、宗内申談何人可相増こと有之儀、早々杢允へ被申聞、相増可被申事

一、尤堀物其外、宗内手を離候而は不罷成仕事等之儀は、取懸仕儀不相成由、左様之儀は所左衛門方六左衛門承届被致了簡、何分にも宜敷相調可被申候、御遷坐到八月中丁十四日に有御坐候へば、其儀段々仕候而相澄候儀は宜ほとらい見図、被致了簡相調可被申事

御遷座前の仕廻について、大工そのほかの職人の人数を何人増やすべきか、六左衛門が詮議して宗内で相談して何人増員するのか、早々に杢允へ申し聞かせるようにとある。

「堀物」(彫物か)その他、宗内の手を離れては出来ない仕事は、取り掛かる事が出来ないので、所左衛門方の六左衛門に届けて調整するように、程合いを能く見図り処置を調えるようにと指示が出されている。

一、御遷座之儀は、去年已来八月に有之様と被仰出置候、善事は急と世俗に申習道理尤之儀ヶ様之事に相当候、有無八月十四日御遷坐有之様、各粉骨被御精出、宗内へも折々被相達部居候、大工諸職人へも折々被申段、無相違中丁十四日に御遷坐有之様、能々御心遣可有之事

御遷座は去年(宝永四年)から八月に決められており、善事は急との言葉からも、工期は余裕のある日程ではなかったことがうかがえる。さらに八月十四日に無事執り行えるようにそれぞれ大工職人に至るまで精を入れて粉骨の働きをするよう檄が飛ばされている。

一、只今之学寮聖堂近くに直候儀、御遷座已後引続直候様、可然先以役者仲間致存候、此段は重而弥遂詮議、請御意可為申候、先以各扨宗内など為心得此段も相達置候事

一、聖堂上瓦於多久焼せ候様と此中被仰出置候、是又先以各可被得其意候、尤焼せ様并役者等之儀は、田代兵右衛門被罷帰候已後、兵左衛門と聖堂役者中と打込僉議(以下欠)

現在ある学寮を聖廟の近くに建て直す作業を、御遷座以後も引き続き行うようにとあり、多久東ノ原にあった川浪自安宅兼学寮(学問所、後の東原庠舎)を、聖廟近くに独立した建物として建て直す計画がこの時すでに進められていたことがわかる。この新しい校舎が建設されたのは、約十年後の享保三年(一七一八)になってからだと考えられる(『多久市史第二巻』七三八頁)。東原庠舎の拡大もまた多久領にとって急務の課題であったようだ。

聖廟の瓦は多久で焼かせることになった。これ以後の文章は欠落している。

以上、聖廟資料49「覚」から、宝永五年八月十四日の聖廟落成前夜の様子をみてきた。一年前から日付を決定し、予定通り孔子像の遷座と釈菜が行われたが、その日に間に合わせるため急ピッチで工事が進められており、実際には内装などまだ完成途中の段階であった可能性があることがわかった。資料からは、あわただしい当時の雰囲気が伝わってくる。今回一つの資料を中心に見てきたが、聖廟創建の裏には様々な苦労があったと推察される。

聖廟資料49「覚」の一部

能古博物館を訪問

6月2日に福岡市の能古島にある能古博物館を訪問しました。能古博物館は、平成元年に財団法人「亀陽文庫」（現在は公益財団法人）により開設されました。筑前亀井学を確立し、福岡藩西学問所の甘棠館（かんとうかん）を創設した亀井南冥（かめい　なんめい）をはじめ、通称「亀井の五亀」といわれるその一族や門人の広瀬淡窓（ひろせ　たんそう）など、江戸時代中・後期の文人たちの著作や書簡、絵画などが展示されています。

敷地内には、「孔子聖廟」や福岡市指定文化財「能古焼古窯跡」、「万葉歌碑」も設置されており、博多湾の眺望と四季折々の風情が素晴らしく、知られざる桜の名所でもあるそうです。

今回の訪問の契機は、「亀陽文庫」で孔子廟と論語を活用した新たな事業の取り組みを検討されていることを知りえたことから。当財団と本旨を同じくする取り組みを、福岡市にある施設がどのように進められているのかを視察させていただきました。今回同行の当財団の服部政昭理事は、以前、能古孔子聖廟での式典や楷樹の移植に携わっておられ、昔話を交えての情報交換をさせていただきました。当財団の論語カルタの取り組みも紹介し、孔子廟や論語を活用した事業での連携も深めさせていただきました。

▲能古博物館　孔子聖廟

来訪・来信・雑録

4月5日　竹川克幸氏（日本経済大学教授）、塚田裕樹氏（原土井病院法人本部）来訪
4月13日　春季釈菜学校関係者事前練習
4月14日　春季釈菜総練習
4月18日　陳銘俊駐福岡台湾総領事ほか来訪
令和5年春季釈菜
4月28日　成岩中華人民共和国駐福岡副総領事ほか来訪
5月12日　公益財団法人孔子の里監査
5月29日　令和5年度第1回理事会
6月2日　令和5年度定時評議員会
6月3日　能古博物館（福岡市）訪問
鶴山塾「古文書教室①」
（講師：舌間輝吉　多久古文書の村村民）
鶴山塾「中国古典の扉①」
（講師：武田耕一　公益財団法人孔子の里理事）
6月5日　草場佩川の会総会・講演会
6月9日　有田町同朋保育園来訪（論語素読会）
6月13日　早稲田佐賀高等学校1年生バス研修（総勢112名）
6月17日　堤幸彦氏（映画監督）来訪
鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」
『石井鶴山の紀行詩－神社仏閣をたずねる－』
（講師：中尾健一郎　熊本大学大学院教授）
6月21日　評議員選定委員会
ゆい工房「本格蕎麦打ち（前期）」
（講師：岸川和則　塩田津ソバの会）
6月23日　藤井倫明九州大学大学院准教授、張崑將・金培懿国立台湾師範大学教授来訪
6月24日　ゆい工房「はじめての短歌（入門）」
（講師：角本久子　日本歌人クラブ佐賀県幹事）
7月1日　鶴山塾「古文書教室②」
（講師：舌間輝吉　多久古文書の村村民）
鶴山塾「中国古典の扉②」
（講師：武田耕一　公益財団法人孔子の里理事）
7月12日　東原庠舎西渓校5年生総合的な学習の時間「多久の伝統～多久聖廟と腰鼓～」へ講師派遣
鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」
7月15日　『草場佩川の「山野一善」（其の二）』
（講師：中尾友香梨　佐賀大学教授）
7月19日　SAGA2024に係る宿泊施設説明会に参加
ゆい工房「中国茶の世界へようこそ」
7月20日　（講師：樋口由美子　一般社団法人日本中国茶文化交流協会認定講師）
鶴山塾「はじめての短歌①」
（講師：角本久子　日本歌人クラブ佐賀県幹事）
7月22日　鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」
7月29日　『太古のブランド石材「多久サヌカイト」』
（講師：越知睦和　佐賀県文化課文化財保護主事）
鶴山塾「古文書教室③」
8月5日　（講師：舌間輝吉　多久古文書の村村民）
鶴山塾「中国古典の扉③」
（講師：武田耕一　公益財団法人孔子の里理事）
ゆい工房「夏休み子ども企画『消しゴムはんこでうちわを作ろう！』」
8月6日　（講師：野田宏美　消しゴムはんこ作家）
東原庠舎消防訓練
8月22日　鶴山塾「はじめての短歌②」
8月26日　（講師：角本久子　日本歌人クラブ佐賀県幹事）
鶴山塾「古文書教室④」
9月2日　（講師：舌間輝吉　多久古文書の村村民）
鶴山塾「中国古典の扉④」
（講師：武田耕一　公益財団法人孔子の里理事）
ゆい工房「水引を使って　おしゃれなブローチづくり」
9月7日　（講師：小川真由子　水引作家）
9月12日　柴田晶子氏（公益財団法人サントリー文化財団）来訪
9月23日　鶴山塾「はじめての短歌③」
（講師：角本久子　日本歌人クラブ佐賀県幹事）
9月26日　令和5年秋季釈菜委員会
9月30日　鶴山塾「多久の歴史と文化を学ぶ講座」
『草場船山に学んだ鹿島藩士八沢様之進の生涯』
（講師：高橋研一　鹿島市民図書館学芸員）

編集後記

暑さ寒さも彼岸まで。猛暑に台風、大雨と記録続きの夏から、いつしか秋を感じる時節となりました。秋分の日は、祖先をうやまい、なくなった人々をしのぶ祝日。今年の秋は、先人に思いを馳せ、何気ない日常の幸せに感謝する日々を過ごしていきたい。（ほ）